東奥日報社提供

東　奥　日　報
2020年（令和2年）9月16日（水曜日）（16）

空き家 キャンパスに変身

八戸 八戸市内丸地区で空き家になっていたスペースを、八戸工業大学の学生有志が自分たちの手で改修し、新しい形のサテライトキャンパスとしてオープンした。学生が主体的に地域と関わる場にしたいと考えており、研究発表やゼミ、地域住民との交流の場として利用していく。

（加藤桃子）

八工大生改修 内丸地区にオープン

同大はこれまでも市中心街の商業ビル内にサテライトキャンパスを設けていたが、2015年に閉所。新たな拠点として新美術館の建築が進む内丸地区に着目していた。同地区は空き店舗・家も増えていることから、今回は学生自らが空き家をリノベーションして活用することにした。

2019年秋から「空き家リノベーションプロジェクト（通称・アキヤプ）」として、同大感性デザイン学部創生デザイン学科と工学部土木建築工学科の3～4年生15人が参加し、作業を進めてきた。

プロジェクトを主導した感性デザイン学部の皆川俊平講師(38)は「やらされているというのではなく、自分から取り組んでいる実感を学生に持ってもらうことで、より深く地域や街とも関わっていけるのではないかと考えた」と話す。

サテライトキャンパスとして生まれ変わったのは、本八戸駅から市庁へ向かう道路沿いにある2階建て店舗兼住宅の1階部分。店舗だったスペースの仕切りなどを取り払い、一つの空間にした。コンセプトは「何をするにも不便であること」。あえて椅子や机などの備品は最小限にとどめた。その代わり、利用者がその都度手を加えることで、変化し続ける場所にしていくという。

研究発表、地域交流の場

オープニングイベントとして、12日から同学部創生デザイン学科など学生によるリレー式の個展を開催。初回は同学科4年髙橋祐賢さん(21)で、日常を立体と光を用いて表現した作品を展示している。

改修作業のメンバーでもあった髙橋さんは「家と大学の往復だった日常に、もう一つ自分の居場所が加わったような感じ。近所の方と今はあいさつ程度だけれど、これから新たな関係性を築いていけたらと思う」と話していた。展示は11月下旬まで。

【写真上】内丸地区の空き家を八戸工業大学の学生たちが改修し、サテライトキャンパスとしての利用が始まった
【同下】空き家をリノベーションしたサテライトキャンパスの外観。1階部分を利用する

※「この画像は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです」